

恋愛の価値は、もうなくなったのか？

——歴史研究の視点から——

日本女子大学 木村絵里子

1 恋愛という概念の成立

恋愛関係のあり方は、文化・社会・歴史的に形成されるものであり、決して普遍的なものではない。そもそも、この「恋愛」という言葉が英語の Love の翻訳語として新しく導入されたのは 1870 年代のことであり、比較的歴史の浅いものである。近年では、現在の我々が用いている恋愛という言葉の起源をこの翻訳語が成立した時期にみており、同時に西洋から概念自体も導入されたというのが定説となっている。

しかし、このような見方では明治期における「恋愛」と現在の「恋愛」を同じものとみなすことは難しい。というのも、明治期における恋愛の観念は、西洋由来の恋愛と、それ以前から存在していた男女の好意を表現する「色」とを対置させた上で、性的要素を禁圧した高度に精神化されたものとして受け入れられたと理解されているからだ。確かに Love という観念は、西欧近代的な「精神」と「肉体」を切り分ける見方をもたらした。長い視野でみてみればこうした流れは、戦後の純潔教育まで続いたということもできよう。一方で、別の議論を注視してみると、新たな「精神／肉体」という知覚に、明治期以前から連続する「恋」という感受性が交差し、結局のところ、恋愛を全く「精神的なものとして完全に「肉体」から切り離すところまでには至らなかったことがわかる。この種の見方は、明治末期以降の通俗性欲学へと受け継がれた。こうした Love と恋愛のあいだにあるズレにこそ、Love という観念の日本独自の展開を見出すことができるのである（木村 2016a）。

2 戦後における恋愛行動の変化

Love と恋愛のあいだのズレは、現在に至るまで引き延ばされ続けている。本報告では、近代の恋愛概念についてはこれ以上深く立ち入らず、戦後の日本社会における恋愛の行動様式の変化に目を向きたい。とくに恋愛と結婚の関係は、恋愛が結婚に必ずしも結びつかなくなったという点において、ここ数十年の間に激変してきたといえる。「たった一人の運命の相手と愛しあつた末に結婚し、子どもを産み育てる」ことを想定した「恋愛結婚」が多数派となったのは、1960 年代後半以降のことであるが、その後、恋愛と結婚は少しずつ切り離され、恋愛を自由に謳歌することが可能になった。

とはいえ、結婚は恋愛に基づくべきだとする逆の関係が解消されたわけではない。現代にあっても「婚前交際」としての恋愛が消滅したわけではないのである。つまり、現代における恋愛とは、ときに非生産的で「今、ここ」における生の充溢をもたらす「純粋な関係性」として、あるいは結婚を前提にした「婚前交際」として、恋人という親密な他者とのつきあい方をライフステージに応じて変化させていくという、ある意味で特異な人間関係へと変容してきたといえる（木村 2016b）。

3 恋愛と性の関係

また、実は、恋愛関係におけるセクシュアリティや性行動のあり方も決して一様ではない。恋愛と結婚が分離されると、恋愛結婚の増加とともにみられた愛と結婚と性の強い結びつき（とその排他性は部分的に解体し、今度は性的な場面において愛やコミュニケーションの重要性が強調され始めた（＜親密性のパラダイム＞）。「愛しあっているなら婚前性交もいいのではないか」というレトリックに表現されているように、性行動は「結婚」ではなく「愛情」に基づきなされるという意識がとりわけ若年層の新たな価値観となったのである。「青少年の性行動全国調査」によれば、身体的成熟の早期化や恋愛至上主義の浸透を背景にして性行動の活発化や低年齢化が進み、とくに 1990 年代以降、若年層の性行動経験率は一貫して増加傾向にあった。

4 問題提起

しかしながら、近年では、若年層の恋愛や性行動に対する消極性（草食化）が指摘されている。「草食男子」とはマーケティングの領域で生まれた言葉であるものの、2010年代以降、学術的な研究においてもその実態が検証されるようになってきている。ただし、この言葉は、明確な概念定義がなされないまま用いられていることもまた確かである。例えば、性行動経験率の減少傾向、恋愛関係のなかで性行動を先送りする傾向、恋人関係にあってもデートはするが性行動までは進まない者の増加傾向、恋愛未経験者における恋人が欲しいと思わない者の増加傾向、グループでつきあう異性や異性の親友はいるけれども恋人は欲しいと思わない傾向、恋愛未経験者の増加を意味する「草食系」、あるいは「草食化」……。このように、実に多様な意味合いによって使用されているのである。これらは恋愛至上主義的な価値観、または恋愛関係と性行為の強い結びつきを自明視した上で、そこから外れる傾向をすべて「草食化」と表現しているのであり、こうした議論のやり方はいささか乱暴に過ぎるのかもしれない。

では、そもそもこのような「草食化」を解釈する際の前提とは、どのように形作られたのだろうか。本報告では、戦後の雑誌資料を素材にして、その前提を対象化してみたい。

文献

- 木村絵里子, 2016a, 「近代的『恋愛』再考——『女学雑誌』における『肉体』の二重性」川崎賢一・浅野智彦編『<若者>の溶解』勁草書房.
- , 2016b, 「『情熱』から『関係性』を重視する恋愛へ——1992年、2002年、2012年調査の比較から」藤村正之・浅野智彦・羽渕一代編『現代若者の幸福』恒星社厚生閣.